

公民的分野における社会的事象の見方や考え方を深める指導の工夫(第一年次)

－「効率」「公正」を中心とした多面的・多角的な視点から－

長期研究員 樋上 聖

I 研究の趣旨

価値観が多様化している今日の社会では、より多くの視点で社会的事象を客観的にとらえることができる力が求められている。それゆえ、公民的資質の基礎を養うことを目標としている中学校社会科の果たす役割は大きい。特に、公民的分野においては、現代社会における様々な社会的事象を扱う学習内容が多い。しかし、価値観が多様化している今日の社会は中学生にはとらえにくい。そこで、現代社会をとらえる見方や考え方の一つとして考えられる「効率」「公正」を中心とした視点を持たせることで、生徒は社会的事象を客観的にとらえることができる。その上で、自分の考えを持つことができるようになれば、今日の社会で求められている力が身に付くと考え、上記のような研究主題を設定した。

II 研究の概要

1 研究仮説

公民的分野の学習において、以下の三つの手だて(図1)を講じれば、社会のしくみや現状、課題をとらえさせることができ、社会的事象の見方や考え方を深めさせることができるであろう。

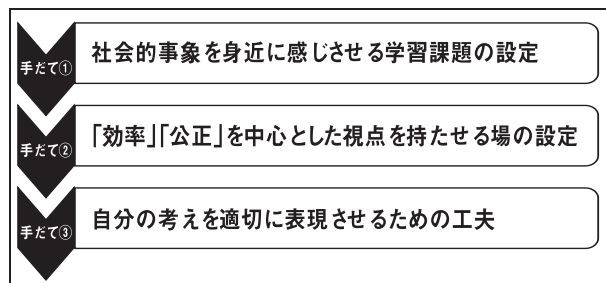


図1 三つの手だて

2 研究の内容と実際

(1) 実践授業Ⅰについて

「現代社会の見方や考え方」の単元で実践した。ここでは、手だて①を中心に述べていく。現代社会の見方や考え方を深めさせるため、現代社会を見た

り、考えたりするための視点の一つである「効率」「公正」から生徒に学習課題を考えさせた。学習課題には生徒が見たり聞いたり、経験したりしたことのある事例を取り上げた。具体的には部活動のきまり、テーマパークで見られるシングルライダー、レジの並び方である。このような事例に基づいた学習課題を考えさせることで、生徒は「効率」「公正」という概念を身近に感じる事ができた。

(2) 実践授業Ⅱについて

「人権と共生社会」の単元で実践した。ここでは、手だて②を中心に述べていく。公共の福祉に関する事例を「効率」「公正」という視点だけでなく、多様な立場を意識させながら考えさせた。具体的には、選挙の連呼行為の制限や中間貯蔵施設の建設が効率的であるのか、公正であるのか考えさせた。このように「効率」「公正」を中心として事例を考えさせたことで、生徒は多様な視点や立場から公共の福祉の意味の理解を深める事ができた。

(3) 実践授業Ⅲについて

「地方の政治と自治」の単元で実践した。地方自治の意識を高めさせるため、グループで考えた廃校の活用法を、「効率」「公正」を中心とした多面的・多角的な視点から検討させた。

① 社会的事象を身近に感じさせる学習課題の設定

単元を通して、「町に、使われなくなる学校の活用法を提案しよう」という学習課題を設定したことで、生徒は地方自治の基本的な考え方にふれた。

② 「効率」「公正」を中心とした視点を持たせる場の設定

各グループが発表した廃校の活用法を、「効率」「公正」を中心とした多面的・多角的な視点から生徒が評価し合う場を設定した。具体的には、単元の半ばで中間発表会を行い、各グループが発表した内容について付箋を使って評価させた。それにより、

生徒はより具体的に考えやすくなり、最終発表会で発表された廃校の活用法の多くは、町の現状を踏まえたものになっていた。また、各学級で支持された五つの廃校の活用法を校内Webサイトに掲載した。そして、技術・家庭科の情報に関する授業と協力し、校内Webサイトを通じて、他の学級の生徒からも五つの廃校の活用法が評価される場を設定した。

③ 自分の考えを適切に表現させるための工夫

個人の考えを基にグループの考えをまとめる際には、プレゼンテーションソフトを活用させた。生徒はグループの考えを明確にして、みんなに分かりやすく伝えようと何度も練り直した。また、考えの根拠となるグラフなどを取り入れさせることで、廃校の活用法をより分かりやすく伝えることができた。

(4) 社会科通信について（6回実施）

社会科通信とは、社会で今起きている事象に対する見方や考え方を深めていくため、教師が新聞記事を一部抜粋したものの対して、生徒に考えを求めめるもので、主に家庭学習として実施した(図2)。教師が生徒の書いた内容に対してコメントを

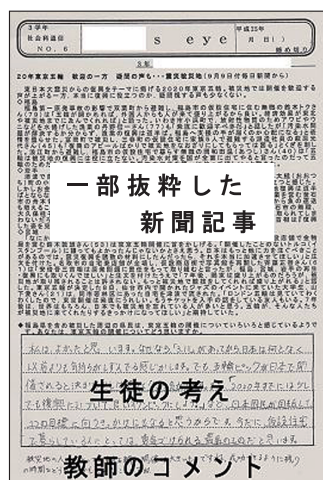


図2 社会科通信6号

記入することで、生徒が自分の考えに自信を持ち、自分の考えとは違った視点に気付いたりするなどのさらなる学びへとつながることをめざした。毎号の社会科通信において、東日本大震災関連の内容を取り上げることで、生徒は身近に起きている事象を改めて意識することができた。さらに、「効率」「公正」を視点の中心として、行政や避難している人、被災した人などの様々な立場を意識させることで、生徒は身近に起きている事象を客観的にとらえることができた。また、グラフなど資料を基に自分の考えを書かせていくことで、生徒は根拠に基づいた自分の考えを持つことができた。

(5) 生徒の実態から

3回実施した生徒の実態調査において、ほぼ全員が、授業について「理解できた」、「考えをまとめる時、多くの視点から考えることができた」と回答した。ただし、実践授業Ⅱ後の生徒の実態調査では、他の実践後の調査より数値が低かった。それは、複雑な視点や立場で考えなければとらえにくい社会的事象であったためと考えられる。視点に基づいた話し合いについては、「他者の意見の重要性を感じた」などの内容を書いた生徒が、全体の67%を占めた。

授業で生徒が書いた内容からは、既習事項を理解していたこと、提示された資料を踏まえて考えていたことなどが分かり、社会参画の意識の高まりも見られた。社会科通信に生徒が書いた内容からは、回数を重ねるごとに、社会で今起きている事象を客観的にとらえられるようになったことが分かった。

Ⅲ 研究のまとめ

1 研究の成果

以前より多くの生徒が公民的分野の学習に興味を持てるようになった。さらに、様々な方向や立場から考えることができた生徒が全体の90%を占めた(図3)。これらの結果から、社会的事象の見方や考え方を深めるためには、「効率」「公正」を中心とした多面的・多角的な視点を持たせることが有効であることが明らかになった。公民的資質の基礎を養うこともできたと考えられる。

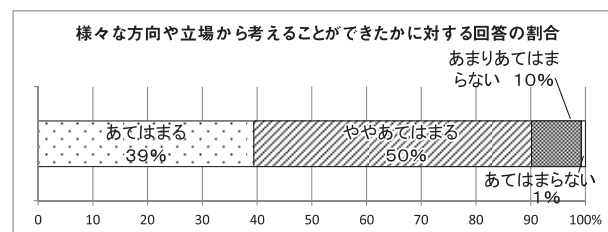


図3 生徒の実態調査の結果の一部

2 今後の課題

実践で取り上げた社会的事象によっては、必要とされてくる視点が多岐にわたり、生徒に混乱を招くことがあった。さらなる公民的資質の育成をめざすためには、要求される視点が多様な事象を教師がしっかりとらえた上で、生徒にどのようにとらえさせていくのかをさらに研究していく必要がある。